

## 高山寺の明恵集団と宋人

### 大塚紀弘

はじめに

洛北梅尾の山中に薨を構える高山寺は、鎌倉前期に明恵上人（明恵房高弁、一一七三～一二三三）によって、神護寺別所の地に創建された。

明恵については、仏教学や文学の立場からの研究が蓄積されており、戦後の成果としては、田中久夫氏や奥田勲氏による伝記研究などが特筆される<sup>1)</sup>。明恵は仏教発祥の地であるインドに対する憧れが非常に強く、「西天修行」を二度計画した。インドに渡るためには、ひとまず入宋する必要はあるが、南宋の仏教自体についてはほとんど興味を持っていなかったようである。しかしながら、後述のように南宋からもたらされた仏典や図像を積極的に利用したことが知られる。明恵は長期にわたって夢の内容を詳細に記録した『夢記』を残している<sup>2)</sup>。本稿では、その中から特に南宋文物に関わる夢を取り上げ、その背景を読み取りたいと思う。

他方、明恵の同法（＝同行）すなわち門弟については、田中氏による喜海の活動についての論考がある<sup>3)</sup>。また高橋修氏は、明恵の出身地である紀伊国湯浅の湯浅氏一門を中核とする武士団を研究する中で、紀伊国での明恵の活動に言及している<sup>4)</sup>。本稿では、以上のような成果に学びつつ、明恵とその門弟、すなわち明恵集団と南宋との関係に焦点を当てること、日宋関係史の視点から高山寺の実態を明らかにしたい。

現在の高山寺には、南宋陶器の茶入、南宋画とされる伝不空像の他、多くの南宋版仏典が伝えられており、かつてはこれらを上回る量の南宋文物があったようである。こうした南宋文物はいかなる経緯によって高山寺にもたらされたのだろうか。本稿では、明恵集団と宋人との関わりを探ること、この疑問に答える仮説を提示したい。

日本と南宋との関係史を考える場合、相互に密接な関係を持つ人間・文物・知識（文化、情報）の三つの対象が想定される。以下、高山寺の明恵集団と南宋との関係について、それぞれ第一章では版本などの文物の輸入と利用、第二章では人間の往来と交流、第三章では仏教に関わる知識の伝来と受容に主眼を置いて考察を進めよう。

#### 第一章 高山寺にもたらされた南宋文物

##### 1、明恵の生涯と南宋

明恵の生涯を知る上で最も参考になるのが、明恵と行動を共にした門弟の喜海が撰述した『明恵上人行状』である<sup>6)</sup>。また、建長五年（一二五三）に後嵯峨院の求めを受けて明恵門弟の高信によって撰述された『高山寺縁起』からは明恵の行動や高山寺の歴史を知ることができる<sup>7)</sup>。さらに明恵が書き残した『夢記』からも、その活動を垣間見ることができ、以下、これらを基に、田中・奥田両氏の研究に導かれながら、明恵の生

(1) 高山寺の明恵集団と宋人（大塚）

涯について概観しつつ、明恵と南宋との関わりを明らかにしよう。

明恵は平重国を父、湯浅宗重の長女を母として、承安三年（一一七三）に紀伊国有田郡の石垣庄吉原村で生まれた。治承四年（一一八〇）に八歳にして、父母を相次いで亡くしたため、母の妹（崎山尼）の夫である崎山良貞が養父となった。そして翌養和元年（一一八一）には、高雄の神護寺に登り、母方の叔父にあたる行慈に託され、僧侶としての人生が始まることになった。行慈は神護寺復興を進めていた文覚の門弟である。文治四年（一一八八）には行慈を戒師として出家し、東大寺戒壇院で具足戒を受けて正式の僧侶となり、真言宗と華嚴宗の修学に励んだ。

ところが、建久六年（一一九五）に明恵は仏像・聖教を持って神護寺を出、紀伊国に下向してしまふ。そして、生家から近い有田郡の湯浅庄須原村の白上峰に草庵を構え、行法・坐禪・誦經・学問といった修行に専念する生活を始めた。当初は乞食により食事を得ていたが、見知った者が多くて煩わしいため、養父の崎山良貞に頼んで五日に一度食事を届けてもらった。釈迦への思慕を深め、思い悩んで右の耳を自ら切り落としたのはこの時期である。

そして、この辺りでは聖教を求めても、「文字不法」の一切経ばかりで、所持の章疏のみでは学問に支障をきたしたため、建久九年頃に神護寺に戻った。その際、文覚は明恵に神護寺にとどまって華嚴宗を興隆するようにと勧め、さらに表具を整えた「墨絵ノ摺本」の「唐本ノ十六羅漢」の軸を与えたという。これが伝記から知り得る明恵と南宋文物の最初の出会いということになる。『高山寺縁起』によると、嘉祿元年（一二二五）に高山寺の羅漢堂に安置された「絵像十六羅漢」八鋪は俊賀が「唐本」を写して施入したものであった。後述する「善財善知識曼荼羅」の例をふまえると、明恵所持の「唐本」が利用された可能性が高い。

一旦は神護寺に落ち着いた明恵であるが、建久九年の秋末に「騒動」

が起こつたため、聖教一〇合余、本尊・仏具などを持って紀伊国の白上峰に戻ってしまふ。すると、実母の兄弟である湯浅宗光が石垣庄筏立に草庵を構えて明恵を招いたため、それに応じて移住し、再び読經・坐禪・修学の修行生活を始めた。さらに、建仁元年（一二〇一）頃には、石垣庄糸野の宗光居館内にあつた成道寺の背後に設けられた草庵に移つた。この頃には、明恵と修行を共にする同法が喜海、靈典ら一人ほどの集団に成長しており、彼らによって毎月二度の間答講が行なわれた。

同年十一月には、明恵に帰依した宗光の妻の援助によつて、四幅の「善財善知識曼荼羅」が制作された。この絵画は、建久年間に明恵が某所で「唐本」から写し取つた「紙形」を基に、京都の仏師俊賀が描いたので、明恵自らが短冊に尊名を書いた。これを濫觴として、「善財善知識曼荼羅」が世に流布するようになったという。後にこの四幅は東大寺尊勝院に施入され、原本は現存しないものの、その図像は東大寺蔵の「華嚴海会善知識図」からうかがい知ることができる。この華嚴変相図には、毘盧舎那如来を中尊に、五四の区画に善財童子が善知識を訪ねる場面が描かれており、裏書から永仁二年（一二九五）に高山寺で描かれたことが分かる。明恵は南宋から請求された華嚴変相図の図像を受容し、その流布に努めたのである。

さて紀伊国に居住して修行生活を送つていた頃の明恵は、二度にわたつてインド巡礼を計画する。まず建仁二年、石垣庄地頭職をめぐる争いを避けて、保田庄星尾の宗光居館の庵室に移つた明恵は、門弟に対して、インド仏蹟巡礼の志を語つたという。ところが翌年正月、春日大明神が宗光妻の橘氏を通じて託宣を告げ、明恵の計画をとどめたため、インド巡礼は取りやめになった。

次に元久元年（一二〇四）には、湯浅氏の地頭職をめぐる混乱を受けて、明恵は石垣・田殿両庄の間にあつた神谷山寺近くの鷲峰に設けた草

庵に移った。同年秋には一旦上洛して神護寺の槇尾坊に居住したが、養父の崎山良貞の病氣を知って紀伊国に下向した。同年十二月に貞重は没し、明恵は中陰の間、湯浅氏一門の宮原宗貞の館に居住した。だが湯浅氏の地頭職還補が未だ認められず、神護寺再興も滞っていたため、聖教を読む場所が得られなかった。そこで明恵は再びインド巡礼を計画したのである。今回は五・六人の同行者を決め、中国の長安からインドの王舎城までの距離を計算するなど、<sup>13)</sup>前回は違つて、ある程度現実的なものであったようである。明恵らは入宋が可能な状況にあったように思われるが、明恵が重病となり、思い止まることを促すくじの結果が出たことから、再び中止を余儀なくされた。なお、後の寛喜二年(一二三〇)頃に、明恵は数人の門弟とともに「入唐」する夢を見ており、この頃まで入宋への思いを失わなかったことがうかがえる。

元久二年夏頃には槇尾坊に戻り、翌建永元年(一二〇六)に後鳥羽院の院宣により神護寺の榎尾別所(十無尽院)を賜り、そこで華嚴宗を興隆し、高山寺と号することが認められた。承元元年(一二〇七)冬に一旦紀伊国に下向したが、同四年(一二一〇)冬には榎尾に戻った。これ以後、明恵らは主に榎尾を拠点に修行生活を送ることとなり、高山寺の伽藍も次第に整備されていく。法然の『選択本願念仏集』に反発した明恵が、高山寺で『摧邪輪』を撰述したのは建暦二年(一二二二)のことであった。伽藍の中心である金堂は、門弟の喜海・靈典の尽力によって造立され、承久元年(一二一九)には長日動行の供養法が始められた。明恵は造立の喧騒を避け、建保三年(一二二五)には西峰の上に庵室・練若台を設け、さらに翌年にこれを山下に移築した住坊・石水院および北峰の草庵に移った。同六年には一旦、上賀茂社神主の能久が賀茂別所(仏光山)に造立した僧坊に移住したが、承久二年に榎尾に戻った。

翌三年五月二十日の夜、明恵は次のような夢を見た。<sup>14)</sup>「十蔵房」が明

恵のもとに一つの「茶坑<sup>ちやん</sup>」の香炉を持ってきた。明恵は心中で、「崎山三郎貞重」が「唐」すなわち中国から「渡」して「十蔵房」に与えたと考えた。それを見ると、中には隔壁があつて、種々の唐物が二〇余種ほど入っており、「両亀交合之形」のものがあつたので、「世間之祝物」だと思つた。この他に、五寸ほどの「唐女形」の「茶坑」があつて、ある人によると、この「女形」は中国から日本に渡つたことを大いに歎いているとのことであつた。明恵が「女形」にそのことを聞くと領いたため、慰めてみたものの効果はなかつた。しばらくして「女形」を取り出してみると、涙を流して日本に来たことを歎いていた。そこで明恵が、自分は日本で人々から崇められる「大聖人」である。大事にするから(安心しろ)と語りかけると、「女形」は快く思つた様子で領いて承諾すると、たちまち生身の女人に変身を遂げた。明恵が明日の仏事に連れて行くことと思つと、女人がそれに応じたので、そこには「公之有縁之人」がいると告げた。その人物とは、唐物を「渡」した三郎の母である「崎山尼公」のことであつた。

以下は省略するが、夢の中での「女形」の正体をめぐる「十蔵房」の発言や目が覚めた後での明恵の解釈が記されている。あくまで夢の話であるので、ここから安易に事実を読み取るべきではなからうが、唐物の夢を見るということは、この頃の明恵周辺、恐らく高山寺に一定量の唐物があつたことをうかがわせる。唐物の「茶坑」とは、釉薬がかかった陶磁器一般を指すと考えられる。例えば、寂照らとともに入宋し、長和四年(一一三三)に帰国した念救は、かつて仏舍利が収められていた「茶坑<sup>茶</sup>」の壺を天台山からもたらしている。<sup>15)</sup>平安中期の『新猿楽記』に列挙された唐物一覧にも「茶坑」が見出だせ、<sup>16)</sup>延久四年(一一七二)に入宋した成尋は、北宋皇帝の質問状に対して、日本では中国からの輸入品として香料、薬、蘇芳とともに「茶坑」を必要としていると答えてい

(17) 鎌倉前期にも平安後期と同様に、日宋貿易によって青磁に代表される多くの中国陶磁が京都などにもたらされていた。(18)

問題となるのが、唐物を「渡」したという「崎山三郎貞重」である。

崎山貞重は他に所見がないが、母が「崎山尼公」すなわち明恵の養母である崎山尼とあることから、高橋修氏の言うように、(19) 明恵の養父である崎山貞良の息と考えてよからう。貞重は系図の上では明恵の兄弟に当るのである。『夢記』には、貞重自身が中国陶磁の輸入に関わったことを示唆する記載があり、これが事実とすると、いかなる手段によったかが気になるところである。『明恵上人行状』から、父の貞良は兵衛尉の官途を有するとともに、紀伊国田殿庄の地頭職にあり、同庄崎山に屋敷を持っていたことが知られる。建仁四年(一一二〇四)正月の『夢記』には、二条大路に水があふれ、明恵が渡ろうとしていたところ、「前山兵衛殿」すなわち崎山貞良が馬に乗ってやってきたことなどが見える。湯浅氏の場合、宗重・宗光父子が平重盛に仕えた後、鎌倉幕府の御家人になり、(20) その宿所が京都の四条坊門高倉にあったことが知られる。(21) 崎山氏にも京都の権門や鎌倉幕府とつながりがあったとすると、京都に居住していた時に何らかのついでに中国陶磁を入手したとも考えられる。

次に「十蔵房」は、『夢記』には他に二ヶ所登場し、承久二年十月二十六日の夢では、ムカデのような虫が「崎山尼公」の手を刺し、「十蔵房」が取り除こうとしたとある。実名は不明だが、明恵の門弟で、崎山尼や貞重の帰依を受けていたと推測される。なお、同じ年の八月十七日、明恵は錦の袋に入った「唐墨」を人からもらった夢を見ている。

承久三年、明恵は再び賀茂に移住したが、翌年梅尾に戻り、賀茂にあった禅堂院などの坊舎を石水院に移築した。安貞二年(一一二八)には、石水院が水害を受けたため、禅堂院を別の場所に移して居住した。そして、寛喜三年(一一三三)正月十九日、明恵はここで六〇歳の生涯を終

えた。二日後、遺体はその近くに埋葬された。

以上、明恵の生涯を概観したが、南宋との関わりとしては、(1) 南宋に由来する「善財善知識曼荼羅」の図像を流布させたこと、(2) インド巡礼を目的として入宋を計画したこと、(3) 周辺に一定程度の中国陶磁があったこと、が挙げられる。次節からは、明恵とその門弟によって形成された明恵集団と呼ぶべき僧侶集団にまで視野を広げ、さらに南宋との関係を探っていこう。

## 2、明恵集団と宋版一切経

明恵集団と宋版一切経との関わりは、明恵が神護寺で修学していた頃にさかのぼる。『神護寺略記』によると、神護寺の経蔵には三組の一切経があり、二組は写本で、欠巻のある古経の「当寺根本御経」、鳥羽院の御願で書写され、後白河院の時に神護寺に安置された「金泥一切経」であった。(23) もう一組が「唐本経」すなわち宋版一切経で、「持明院中納言基家卿」が神護寺に安置し、「大納言朝方卿筆跡」という目録が副えられていたという。藤原朝方(一一三五～一二〇二)が権大納言になったのが文治四年(一一八八)十月、持明院基家(一一三二～一二一四)が同四年十月から同五年七月まで権中納言を務めていることから、(24) その頃に神護寺に宋版一切経が寄進されたと考えられる。

明恵が宋版を含む神護寺の一切経を利用していった可能性は高い。高山寺に伝わる『大方広仏華嚴経』(四十華嚴)卷三十四、『大方広仏華嚴経』(六十華嚴)卷三、四十四は、奥書から、建久七年に東大寺尊勝院本と校合された後、それぞれ建久八年、同九年に神護寺経蔵の「唐本」と再度校合されたことが分かる。(25) 六十華嚴については、卷二十二、四十六にも神護寺経蔵の唐本を使用した旨を記した校合奥書があり、全巻の校合に神護寺の宋版が利用されたと推測される。卷四十四には校者として

「定□」が見え、明恵の門弟であった定恩の可能性がある。先述のように、この頃の明恵は紀伊での修行生活で、一切経利用の不便を感じており、明恵の意向を受けた同法によって、神護寺の宋版が校合本として利用されたと考えられる<sup>26)</sup>。

明恵集団の修学に大きな影響を及ぼしたと考えられるのが、南宋から請来され、高山寺に安置された版本の一切経（福州版）と章疏である。ここではまず宋版一切経について検討しよう。寛喜二年（一二三〇）三月二十五日の夜、明恵は次のような夢を見た。一切経を輸入するために一人の門弟を天竺に遣わそうと思ったが、その門弟はもし天竺にとどまったら、住坊の修理ができないうと躊躇する様子であった。そこで、老年に達しているこの門弟の派遣を中止し、住坊を修理することにした。

この後、明恵による夢の解釈が示されているが省略する。実はこれ以前、高山寺には南宋から一切経がもたらされていた。『高山寺縁起』には、高山寺堂舎の沿革や安置される仏像や仏典などについて詳細に記されており、「経蔵二字」のうち「西経蔵」について以下の記述がある（〈〉内は小字、以下同じ）。

奉レ納<sup>二</sup>置<sup>一</sup>一切経<sup>一</sup>。（唐本。福州本云々。）

合<sup>二</sup>大小乗経律論・賢聖集等<sup>一</sup>六千三百三十九卷。

中央奉<sup>レ</sup>安<sup>二</sup>置木像大日如来像一<sup>一</sup>軀<sup>一</sup>。

右一切経并経蔵、法性寺刑部入道（不<sup>レ</sup>知<sup>二</sup>実名<sup>一</sup>）所<sup>二</sup>沙汰進<sup>一</sup>也。

また『高山寺聖教目録』には、冒頭に「一切経二部之内」として、以下の記述がある<sup>27)</sup>。

一部、唐本。納<sup>二</sup>西経蔵<sup>一</sup>。刑部入道渡進。

この目録は、高山寺にあった聖教の一覧で、一切経、五部大乘経、大般若経の他、合計一〇一合の箱に華嚴・律などの章疏が入っていたことが

分かる。『高山寺縁起』には、「東経蔵」に写本一切経や仏像の他、「華嚴・天台・法相等章疏并真言書籍」が収められているとある。その一覧がこの目録と考えられ、建長二年（一二五〇）に『高山寺縁起』と同じく後嵯峨院の求めにより、明恵門弟の霊典が注進したと伝えられる。

以上から、「法性寺刑部入道」が南宋の福州で刊行された宋版一切経（福州版）を寄進し、同時にそれを安置する経蔵を造立したことが分かる。北宋代に福州の東禪寺と開元寺の両寺では別々に一切経が開版され、南宋代になつて補刻や追雕が施されたが、両者は形式が類似し、日本に請来されたものは両者が混合していることから、合わせて福州版と呼ばれる<sup>28)</sup>。『高山寺縁起』には、寛喜元年に宋版一切経を収める西経蔵が、かつて鎮守三社のあつた地に造立されたとあり、これ以前に宋版一切経が請来されていたことになる。

高山寺所蔵の『大方広仏華嚴経』（四十華嚴）巻四、十一、十五、二十三、二十七、三十七、三十九には、建保五年（一二一七）六月から八月にかけて、西山の梅（梅）尾あるいは高山寺で「唐本」を用いて校合したことを記した奥書がある<sup>29)</sup>。巻三十七には、「我禪聖人本也云々」とあり、これが事実だとすると、建暦元年（一一一一）に南宋から帰国した俊芿（我禪房）が請来した宋版により校合したということになる。高山寺の明恵集団と俊芿の関わりを示す例として興味深い<sup>30)</sup>が、四十華嚴は福州版を含む版本一切経には含まれておらず、ここから高山寺に福州版があつたかどうかの判断はできない。ただし、承久三年（一二二一）に明恵は、「大宋朝」から「新渡」の「通玄論」すなわち唐・李通玄撰『華嚴合論』を見ている<sup>31)</sup>。後述の『唐本一切経目録』から、この書が福州版に含まれていることが確認でき、これ以前の請来が確かめられる。

さて高山寺に福州版を寄進した「法性寺刑部入道」とはいかなる人物であろうか。注目されるのが、明恵の活動を支援した湯浅氏一門の系図

に見える糸我貞重である。貞重は崎山尼の兄弟である宗方の息で、施無畏寺蔵の「湯浅一門系図」には、「刑部入道寂西」、上山家蔵の系図には「糸我刑部丞」「法名舜西」の注記がある。<sup>(32)</sup> また、『神護寺文書』には、文覚の四天王寺再建に関わって湯浅庄からの材木運搬を担当していた人物として見出せ、「糸賀刑部丞」あるいは「刑部入道」「沙弥寂西」と表記されている。<sup>(33)</sup> この糸我貞重は、寛喜三年（一二三二）に紀伊国湯浅庄に建立された施無畏寺の敷地内での殺生禁断を誓って花押を加えた湯浅氏一族の中に、「前刑部丞藤原貞重」として見える。<sup>(34)</sup> また、暦仁元年（一二三八）に鎌倉幕府は京都警護のため辻々に簷屋を設け、湯浅氏一族は八条辻の警護を担ったが、その結番定文に「糸我刑部允貞重」が見え、<sup>(35)</sup> これ以前に在京御家人になっていたことが分かる。

糸我貞重（刑部入道寂西）が高山寺に福州版を寄進した「法性寺刑部入道」と同じ人物だとすると、京都の法性寺辺りにその宿所があったということになる。西経蔵が造立された寛喜元年には、貞重はまだ出家していないが、『高山寺縁起』成立当時の呼称と考えれば矛盾はない。そこで、さらに想像を重ねると、先に唐物を輸入した人物として検討した崎山貞重との関係が浮上する。名前が同じであることが偶然でないとする、崎山貞重が湯浅宗方の猶子になった可能性もあるだろう。良貞の没後、後家の崎山尼が田殿庄崎山の邸宅を明恵に寄進したこと、貞重以降、崎山氏の活動が全く確認できなくなるのはこうした経緯によるのかもしれない。

高山寺の福州版については、高山寺蔵の『唐本一切経目録』からその構成が判明する。<sup>(36)</sup> この目録は鎌倉前期に高山寺西経蔵にあった福州版の一覧と考えられ、明恵自筆の題箋を伴い、福州版を基に同じく南宋・湖州思溪の円覚院（のち法宝寺と改称）で開版された湖州版との異同を朱筆で注記している。<sup>(37)</sup> 形式としては、仏典名・巻数の他、千字文による帙

の編成、さらに帙を収納する函の編成と考えられる一から百九十一までの番号が付されている。また、末尾には「都合六千三百三十九卷」と合計の巻数が記されている。

### 3、南宋版章疏の輸入と利用

建長二年（一二五〇）の『高山寺聖教目録』に列挙されている章疏のいくつかには「唐本」の注記があり、南宋から請求されたものが判明する。また、高山寺所蔵あるいは旧蔵の南宋版との照合により、注記がないものの中にも「唐本」が含まれていることが分かる（付表参照）。<sup>(38)</sup> 鎌倉時代の高山寺東経蔵には、大量の南宋版が安置されていたのである。それでは、これらはいづつ高山寺にもたらされたのだろうか。

承久二年（一二二〇）五月上旬のある日、明恵は「靈鰻菩薩飛騰之形事」について思いを巡らしていた。<sup>(39)</sup> その日の日中、仮眠を取っていたところ、次のような夢を見た。一つの清く澄んだ池があり、その中からウナギのような長さ一尺余りの魚が飛び上がった（『夢記』には、体をS字に曲げた形が表記されている）。これこそが「靈鰻之応験」である。

明恵が池からウナギの飛翔する夢を見たのは、「靈鰻菩薩」についての文献を読んでいたからだと考えられる。天理大学附属天理図書館には、南宋版の『明州阿育王如来舍利宝塔伝・護塔靈鰻菩薩伝』が所蔵されており、冒頭に「高山寺」印があることから、高山寺旧蔵と判明する。<sup>(40)</sup> したがって、『高山寺聖教目録』に見える「明州阿育王山靈鰻伝一卷」はこれを指すと考えられる。この仏典は、いずれも開宝五年（九七二）に呉越国の贊寧が撰述した『舍利宝塔伝』と『護塔靈鰻伝』を合わせたもので、<sup>(41)</sup> 崇寧二年（一一〇三）に『建中靖国統灯録』の撰述で知られる開封・東雲寺の禅僧・惟白が著した両書の序が冒頭に付されている。

二書のうち『護塔靈鰻伝』は、南宋明州の阿育王寺の東一里余りにあつ

た「聖井」に生息していたウナギすなわち「靈鱓菩薩」の靈験を記したもので、長さが一尺五寸で、「游泳跳躍」したとする記述がある。まさに明恵は現存するこの南宋版を読んでいたと考えられるのである。すると、承久二年以前に高山寺にもたらされていたことになる。

次に手がかりになるのが、南宋版章疏あるいはその転写本に付された奥書である。まず、卍統藏経に収録されている唐・裴休撰『勸發菩提心文』には、末尾に紹興二十二年(一一五二)の刊記が引用されており、さらに次の奥書がある。

建保三年四月十八日、從<sub>二</sub>大宋國<sub>一</sub>得<sub>二</sub>此本<sub>一</sub>。披閱之處、隨喜尤深。仍同五月十八日夜子尅、於<sub>二</sub>梅尾之練若台<sub>一</sub>、切句加<sub>二</sub>假字<sub>一</sub>、樂<sub>二</sub>同心道俗<sub>一</sub>。時屬<sub>二</sub>末代<sub>一</sub>、人無<sub>二</sub>大心<sub>一</sub>。今值<sub>二</sub>此文<sub>一</sub>、如<sub>三</sub>穢庭得<sub>二</sub>摩尼<sub>一</sub>。無<sub>レ</sub>限末世有<sub>レ</sub>憑<sub>二</sub>成仏<sub>一</sub>、願生生世世須<sub>二</sub>此文<sub>一</sub>矣。

沙門高弁

建保三年(一一二五)に高弁すなわち明恵が、南宋からこの版本を輸入し、高山寺の練若台で切句して仮名を加えたことが分かる。明恵が南宋版を利用していたことは確実となったが、さらにその門弟については、卍統藏経所載の宋・師会撰『華嚴一乘分齊復古記』に「復古記奥書」として、建保四年に隆弁が「高山寺草菴」で「新渡御本」を底本として書写した旨の記述がある。また、卍統藏経に収録される宋・觀復撰『遺教経論記』巻一の奥書には、貞永二年(一一二三)に賢弁が「石水御房」で「新渡唐本」を底本として書写したことが記されている。さらに、禅林寺蔵の宋・子璿撰『起信論疏筆削記』巻六には、次の奥書がある。

貞応三年(甲申)二月六日、於<sub>二</sub>西山梅尾禅堂院<sub>一</sub>、与<sub>二</sub>十余輩之衆徒<sub>一</sub>、奉<sub>レ</sub>对<sub>二</sub>明恵上人御房<sub>一</sub>、一部読義之功了。此書者、大宋国新渡之書故、始<sub>レ</sub>読之。仍且為<sub>二</sub>後学<sub>一</sub>、且為<sub>レ</sub>防<sub>二</sub>自廢忘<sub>一</sub>、受<sub>二</sub>彼口决<sub>一</sub>、切句交点了。学文次志<sub>二</sub>交点<sub>一</sub>之間、訛謬定多々歟。後

人刊<sub>二</sub>定之<sub>一</sub>矣。 花嚴末資喜海 四十七

以上から、高山寺には建保三年頃から貞応三年にかけて続々と、あるいはそれ以前に一括して、華嚴宗関係を中心に、宋代撰述のものを含む一定程度の南宋版章疏がもたらされたと考えられる。そして明恵集団は、修学に際してその一部を転写して利用したのである。卍統藏経の唐・宗密撰『円覚経道場修証儀』巻三には、「根本写本」として、寛元二年(一一四四)に「梅尾西房」で「経藏唐本」を底本として書写した旨の奥書が引用されている。この頃には、南宋版の章疏が高山寺の経藏に収められていたのである。なお鎌倉後期以降、高山寺の南宋版は寺外の僧侶にも貸し出されたことが知られる。

## 第二章 日宋交流史の中の高山寺

### 1、高山寺の入宋僧と宋人

高山寺の宋版一切経(福州版)請来に関係した人物については、なぜか喜海が著した『明恵上人行状』や『高山寺縁起』には記されていない。他方、晩年に明恵が定めた置文には、明恵が高山寺の後事を託した有能な七人の門弟が挙げられており、以下の記述がある。

行弁法師、凌<sub>二</sub>万里之波濤<sub>一</sub>、渡<sub>二</sub>六千余卷之経卷<sub>一</sub>。此事源起<sub>レ</sub>自<sub>二</sub>信慶法師之大願<sub>一</sub>、如<sub>二</sub>文殊大智・普賢行願<sub>一</sub>。

南宋からの「六千余卷之経卷」すなわち福州版の請来は、信慶の発願に応じた行弁の渡海によって実現されたのである。これは裔然による北宋勅版(開宝蔵)の請来以後、入宋僧による宋版一切経輸入の確認できる初例でもある。行弁は、喜海らとともに当初から明恵と生活を共にした五人の門弟の一人で、高山寺中坊(観海院)の第一世となり、建長八年に没したことが知られる。

高山寺所蔵の南宋版のうち、『首楞嚴経義疏釈要鈔』『金剛経纂要科』

などは、表紙の署名から行弁が所持していたことが分かる。<sup>(53)</sup>南宋版章疏の多くは、福州版とともに行弁が南宋の貿易港である明州などで購入し、高山寺にもたらしたと考えてよいのではなからうか。崎山貞重が中国陶磁の輸入に関わっていたらしいことは先述の通りである。行弁の福州版請来を金銭的に支援した「法性寺刑部入道」が貞重その人であるとの想定をふまえると、中国陶磁も行弁によってもたらされた可能性があろう。<sup>(54)</sup>そして、南宋版章疏の多くも行弁の請来だとすると、先述の奥書から、それは建保三年(一一二五)頃のこととなる。<sup>(55)</sup>

次に、高山寺僧の空弁による寛喜二年(一二三〇)付の書状に、「正達坊」勤果と「円道坊」信慶について、「凌二万里之蒼波一、瑩二戒珠於宋朝一」とあり、<sup>(56)</sup>明恵門弟の勤果と信慶にも入宋経験があったことがうかがえる。また『高山寺聖教目録』には、第四十六箱の箇所に、「已下唐本等、円道房(信慶)・弁海房渡進。近年浄見房(行弁)少々渡進」の朱注がある。<sup>(57)</sup>これによると、行弁の入宋以前に、信慶と弁海房が第四十六箱以下に収められていた南宋版の律宗章疏を請来したことになる。『高山寺縁起』によると、高山寺の羅漢堂には、信慶が施入した「唐本絵像釈迦三尊各一鋪」「唐本絵像阿弥陀如来一鋪」があった。信慶は治承元年に生まれ、高山寺尾崎坊(三尊院)の第一世となり、正嘉二年に没したと伝えられる。<sup>(58)</sup>寛喜四年の明恵置文では、明恵集団で最も重視された行事である毎月二度(十五日と晦日)の説戒を担当するよう託されている。<sup>(59)</sup>

以上のように、鎌倉前期の高山寺には、入宋僧の行弁らによってもたらされた多くの南宋文物があったのである。しかも、高山寺には明州出身の宋人書生が居住していた。寛元二年(一二四四)の書写奥書を持つ東寺本『宋本一切経目録』の末尾には「本記云」として次のようにある。<sup>(60)</sup>

寛喜二年庚寅八月三日、於二西山高山寺阿弥陀堂一、校二勘唐本目

録一、委注レ之畢。重可二合点一矣。

宋朝鄞峯城居書生周徳榮、於二日本国高山寺闍伽井坊一、重述三此目録一。

歳峯仁治二年辛丑正月二十七日書写畢。

まず寛喜二年に高山寺の阿弥陀堂で行なったという「唐本目録」の校勘は、湖州版の目録との照合を意味すると考えられる。<sup>(61)</sup>すると、この時の校勘を基に先の高山寺本に朱注が施されたのかもしれない。以下の記述から、校勘したのは「宋朝鄞峯城居」すなわち南宋・明州の出身である書生の周徳榮と考えられる。すなわち、仁治二年(一二四一)に徳榮が高山寺の闍伽井坊で、再びこの目録を著述・書写したとある。高山寺本と比べると、東寺本には、湖州版にあつて福州版にない『宋高僧伝』三〇巻と『大般涅槃經』(南本)三〇巻が末尾に追加されており、この時に増補された可能性がある。

高山寺で書生として活躍した宋人周徳榮は、日本に向けての商船が出港する南宋の貿易港である明州の出身であった。<sup>(62)</sup>したがって、明州から日本に向けて出発したと考えられる行弁が、この宋人を日本に連れて来たとも考えられよう。香川県の善通寺には、<sup>(63)</sup>康安二年(一一三六二)に賢西が撰述した『真友抄』の写本が所蔵されている。この文献は撰者の賢西とその師で高山寺池坊(覺園院)の第四世の慈順との問答によって構成され、第七には、慈順の発言として、「ムカシ(昔)池坊二、モノカク唐人アリキ」とある。この「モノカク(物書)唐人」は、宋人書生の徳榮その人を指すように思われる。

高山寺は鎌倉中期にも入宋僧を輩出したようである。『古経題跋』に高山寺蔵として、「華嚴経疏抄卷第二」の以下の奥書を引用している。<sup>(64)</sup>

大宋咸淳第七辛未春中月下七日、於二宋朝湖州思溪法宝禅寺一、借二得行在南山高麗教寺之秘本一写レ之畢。執筆沙門弁智



正応五年九月廿一日夜、於<sub>二</sub>湖州法玉禪寺<sub>一</sub>加点了。求法沙門沢舜最初の奥書から、咸淳七年<sub>二</sub>文永八年(一二七二)<sub>一</sub>に入宋僧とみられる弁智が、湖州思溪の法宝寺で杭州・高麗教寺(慧因寺)の「秘本」を借りて書写したことが分かる。<sup>(65)</sup>この「華嚴経疏抄」については、最初の奥書とほぼ同文が<sub>二</sub>正統藏經に収録されている、遼の上京にあった開龍寺の鮮演が撰述した『華嚴経談玄決択』<sub>一</sub>巻四の奥書に見ることから、この華嚴章疏の巻一を指すと考えられる。<sub>二</sub>正統藏經所載の巻三には、「本云、(辛未)同三月一日、於<sub>二</sub>大宋國<sub>一</sub>一交了」とあり、これも第一と同じ弁智による校合奥書の引用であろう。

次に、二番目の奥書から、正応五年(一二九二)に入宋僧の沢舜が同じ法宝寺で加点了ことが分かる。高山寺に伝来したことから、その後この章疏は同寺にもたらされたはずである。明恵の諱である高弁の一字を持つ弁智は高山寺僧の可能性が高く、沢舜も同じとみてよからう。そして、弁智らが法宝寺にいたのは、先述した宋版一切経(湖州版)を購入するためだったのでなかろうか。<sup>(67)</sup>先の『真友抄』第七には、慈順の言葉として、「池房ノ先師」が中国から一切経を輸入しようとしたが断念したという逸話が記されている。高山寺西経藏の福州版は鎌倉後期にはすでに失われていたのかもしれない。

そこで注目されるのが、愛知県南知多町の岩屋寺に所蔵される湖州版一切経で、奥書から次のことが分かる。<sup>(68)</sup>すなわち、弘安四年(一二八二)に高山寺観海院を住坊としていた仁和寺の法助が『高僧伝』を閲覧し、高山寺十無尽院第三世の経弁が正安四年(一二三〇)に『十地経論』巻一、徳治二年(一一三〇五)に同巻三に加点了。経弁は永仁元年(一二一九三)に『高僧伝』、正和二年(一二三三)から文保元年(一二三二七)にかけての五年間で『大般若経』を転読(読誦)している。以上から、この湖州版は弘安四年までに高山寺に請来されたと考えてよからう。

他方、金沢・称名寺所蔵の『華嚴経談玄決択』巻一は、奥書から弘安八年に高山寺で書写されたことが分かる。<sup>(69)</sup>注目されるのが、その前に「写本記云」として引用されている次の記述である。

高麗国大興王寺、寿昌二年歲次(丙子)、奉<sub>レ</sub>宣雕造。  
大宋国崇吳古寺、宣和五年(癸卯)歲、釈安仁伝写。

淳熙歲次己酉、吳門釈租灯、科点重着。時年七十二歲也。

ここから、寿昌二年(一一〇九六)に高麗の大興王寺で開版された版本またはその転写本が南宋の「崇吳古寺」にあり、これを宣和五年(一一二三)に安仁が書写し、さらに淳熙十六年(一一八九)に租灯がこれに加点了ことが分かる。この写本の祖本である高麗版は、高麗の義天が、南宋を始めとして遼や日本からも仏典を集めて開版した諸宗章疏の一つである。<sup>(70)</sup>この華嚴章疏を高山寺に請来したのは弁智だったのかもしれない。すると、弁智の後を受けて沢舜が、これを携えて入宋して法宝寺で加点了、さらにそれを持ち帰ったことになる。

ここで高山寺所蔵の『華嚴経談玄決択』が「十無尽院」印を持つことに注目したい。高山寺には「高山寺」印の他にこの印を持つ南宋版が伝わっている(付表参照)。これらの多くは『高山寺聖教目録』に見えないことから、建長二年(一二五〇)以降にもたらされたことになる。そして、『華嚴経大疏演義鈔会解記』巻四に、正応二年に同院でその第三世の経弁が加点了ことを記した奥書があることから、それ以前にまとめて請来された可能性が高い。とするならば、先の弁智が法宝寺で書写した『華嚴経談玄決択』の写本とともに、これらの南宋版それに先の湖州版一切経を高山寺の十無尽院にもたらしたとの推定もできよう。

## 2、宋商人金源三と慶政

明恵は九条道家の兄とされる入宋僧の慶政(一一八八〜一二六八)と

深い交流があった。<sup>(72)</sup>すなわち、慶政は承久四年(一二二二)に明恵から、その著『仏光観略次第』を伝授されて書写し、貞応三年(一二二四)には、明恵と和歌のやり取りをしている。<sup>(74)</sup>さらに嘉祿三年(一二二七)には、慶政の建立した多宝塔の供養導師を明恵が勤めている。<sup>(75)</sup>

慶政は嘉祿二年に著した『法華山寺縁起』で、自身が渡海して南宋の福州に到着し、「唐本五部大乘経二百五十余卷」をもたらしたとして<sup>(76)</sup>いる。この「唐本」は、宋版一切経(福州版)の一部と考えられる。関連して、嘉定十年(一二二七)に、慶政は泉州で「南番文字」を書いてもらい、それを明恵に送っており、その原本が現存している。<sup>(77)</sup>

慶政は福州版の請求を目的に、建保五年頃、又はそれ以前に入宋した可能性が高いように思われる。他方、先の推測が正しいとすると、建保三年頃に行弁によって、高山寺に福州版、南宋版章疏および中国陶磁がもたらされたことになる。すると慶政は、明恵門弟の行弁とともに福州版の請求を期して入宋したか、行弁による福州版請求の情報を受けて渡海したか、いずれかであろう。

福州版(東禪寺版)の版心に残る施財銘から、慶政は帰国後にその補刻事業に金銭的援助をしたことが知られる。また、弘長三年(一二六三)には、西山の法華山寺(峯堂)で「唐本一切経」を供養している。<sup>(78)</sup>宮内庁書陵部にある福州版には「法華山寺」印が押されており、慶政が供養した「唐本一切経」がこの福州版にあたりとされる。<sup>(79)</sup>入宋時に福州では一切経の一部購入にとどまったため、慶政は門弟を介して補刻事業に協力し、それにより刊行された福州版を輸入したのであろう。

寛元二年(一二四四)、慶政は同年に南宋から帰国した「船頭并一両同法」の話聞いて、『漂到流球国記』を著した。<sup>(80)</sup>それによると、彼らの船には三〇人以上が乗っており、寛元元年九月八日に肥前国「小置賀島」(五島列島の小値賀島)を出発し、同月十七日に「流球国」(台湾か)

に漂着したものの、同月二十九日には福州に到着している。そして、翌年五月二十日に中国を離れ、六月一日に帰国した。この「同法」すなわち慶政の門弟は、福州版の請求を目的に入宋したとみてよからう。<sup>(81)</sup>ただ現存する福州版に淳祐十一年(一二五一)の刊記があることから、この時には請求が実現しなかったことになる。

ここで、慶政が宋人と推測される「船頭」に接触していることに注目したい。慶政や行弁らは博多津に住む宋商人の商船に同乗して入宋したはずだが、その頃の京都にも宋商人がいたことが知られる。『外記日記』によると、弘長元年に関白となった二条良実は、寺領三十余所を慶政に委ね、「七条金党等」による法成寺の造営を企画したが、文永二年(一二六五)に関白が一条実経に代わったため、慶政は辞退したという。<sup>(82)</sup>ここから慶政と七条の「金党」につながりがあったことがうかがえる。

これをさかのぼる寛喜三年(一二三一)、塩小路西洞院辺りが炎上し、火は「潤屋」が集中する東の(塩小路)町まで広がった。<sup>(83)</sup>そこには「所謂金源三某之者余流等」が居住していたが、群盗に囲まれて放火されたという。塩小路は七条大路の一本南で、「号金源三某之者余流」は、慶政と密接な関係にあった七条の「金党」と同じとみてよからう。それでは、「金党」を形成したという「金源三」とは何者なのだろうか。

『仁和寺日次記』によると、承久二年(一二二〇)正月に「商客字源三次郎」は、松尾南谷辺りに経蔵と三重塔を造立し、玄信を導師として供養を行なったが、同年九月に没したという。<sup>(84)</sup>玄信も同年四月に没したとい、建保三年には尊勝寺・円勝寺・金剛心院執行であったことが知られる。<sup>(85)</sup>この金源三が造立した「幽寺」は「金堂」と号された。<sup>(86)</sup>

金源三は有力な「商客」すなわち宋商人で、その一党は京都の七条に居を構えていたのである。この金源三は博多津や南宋に住む宋商人と密接な関係にあったと考えるのが自然で、慶政や行弁らの入宋にも協力し

た可能性が高いように思われる。なお、時期は下るが、文安三年（一四四六）に東岩蔵寺の行譽が著した『壺囊鈔』は、金源三について興味深い逸話を伝えている。金源三の和歌に次のようなものがあった。

唐（もろこ）シノカラ（唐）紅ニサキ（咲）ニケリ、我カ日ノ本ノ大和ナテシコ（撫子）

藤原定家はこれを秀歌と考え、『新勅撰和歌集』に入れようとしたが、『我カ日本』の部分不相応とされた。この部分を「此ノ日本」と直せば入首が認められることになったが、金源三は日本で生まれた「皇民」なので直す必要がないとして拒否したため、結局入首がかなわなかった。

金源三は博多津辺りで生まれた宋人だったのかもしれない。鎌倉中期以前、日宋貿易に携わる宋商人は博多津に集住していたとされるが、金源三の例から、一部の関係者は京都にまで進出していたことがうかがえる。文永二年（一二六五）頃に「宋人」が南都系の律僧である信忍に帰依し、東山の靈山に堂庵を立てて施与したことが知られるが、この宋人も京都の有力な商人とみてよからう。

### 第三章 阿育王石塔の造立をめぐる

#### 1、高山寺の明恵髪爪塔と阿育王石塔

『高山寺縁起』には、高山寺の麓に設けられた「別庄」外畑歎喜園の「上人影所」の項に「同處石塔一基」として次の記述がある。

右塔婆者、依<sup>二</sup>敬重上人之徳恩<sup>一</sup>、以<sup>二</sup>彼髪爪<sup>一</sup>納<sup>二</sup>此塔婆<sup>一</sup>。々々者、則摸<sup>二</sup>大唐育王塔之形<sup>一</sup>。〈曆仁二年己亥二月廿四日供<sup>二</sup>養<sup>一</sup>。導師義林房。〉

明恵没後七年にあたる曆仁二年（一二三九）、明恵門弟の義林房喜海を導師として石塔が造立供養された。この塔は「大唐阿育王塔」の形を模した形態で、明恵の恩徳を敬重する門弟たちによって、その遺髪と爪が

納入されたという。

それでは、この明恵髪爪塔が手本にした「大唐阿育王塔」とは、いったい何のことであろうか。一切経に収録される仏典である『阿育王伝』や『阿育王経』には、インドの阿育王（アシヨカ王）<sup>90</sup>が八万四千の宝篋を作り、その中に舍利を納入したことが説かれている。これが阿育王塔に他ならない。南北朝時代には、この阿育王塔が中国にも運ばれたという説が生まれ、いくつかの所在地が比定されるようになった。その第一に挙げられるのが、「会稽鄞塔」すなわち明州・阿育王寺の塔である。<sup>91</sup>

高山寺の明恵髪爪塔は、この阿育王寺塔の形式を念頭に置いて造立されたとみられる。

阿育王寺の舍利殿に安置された阿育王塔は、簡単には拝観できなかったはずだが、阿育王塔の図像自体は、明州を中心とする中国江南地方には広く知られていたようである。日本に請来された南宋画では、明州の絵師・金大授の作になる多田院旧蔵の十六羅漢図、淳熙五年（一一七八）から十五年頃に描かれ、明州の恵安寺に施入されたことが知られる五百羅漢図などの一図に阿育王塔が描かれていることはこれを示唆する。<sup>92</sup>先述した『明州阿育王如来舍利宝塔伝・護塔靈鰻菩薩伝』の冒頭には、「阿育王所造如来舍利宝塔」と「皇子判府制置大王造金塔」の精緻な図像が載せられている。これは天保九年（一八三八）に慧友が修補した時に転写されたもので、原本の性格は不明であるが、こうした阿育王塔の図像が、すでに南宋代に明州周辺で刊行されて流布していたとしても不思議ではない。そして、白河院が阿育王寺から仏舍利を取り寄せたと伝えられること、重源が阿育王寺舍利殿の造営に協力したことから、平安後期にすでに阿育王寺塔の図像が日本に伝来していた可能性もあろう。<sup>93</sup>開宝八年（九七五）、台州天台県にあった天台宗の伝教院では、舍利の代わりに『法華経』を納めた「育王石塔」が造立された。<sup>94</sup>先の南宋画

五百羅漢圖の一図には、三匹の鬼が石塔にも見える阿育王塔を造営する様子が描かれている<sup>(95)</sup>。また現在、福建省泉州市などには南宋代の阿育王石塔が多数分布している<sup>(96)</sup>。このように、中国で阿育王塔が石塔として造立されたのは、唐・道宣の『集神州三宝感通録』に見える「靈塔相狀青色、似石而非石」との記述の影響によると考えられる<sup>(97)</sup>。

それでは、高山寺の明恵集団は、なぜ阿育王石塔に師の遺髪と爪を納入したのであるか。南宋の『仏祖統紀』によると、劉宋・元嘉二年(四二五)、道祐は勅を受けて阿育王寺を修造し、地面を掘ったところ「金合」が見つかり、その中に三つの舍利、仏爪、仏髪が入っていたため、「浮図三級」を建立した<sup>(98)</sup>。また、大同三年(五三七)には、阿育王塔の一つとされる建康・長干塔から「舍利爪髪」が見つかったという<sup>(99)</sup>。

中国では、阿育王塔には舍利のみならず、仏爪・仏髪が納入されていると考えられていたようである。明恵の門弟たちは、こうした情報に接して、明恵の遺髪や爪を阿育王石塔に納めたと考えられるのである。そして、これまでに明らかにしたように、明恵集団は南宋と密接な関わりを有しており、阿育王寺塔や阿育王石塔についての知識や図像が高山寺に伝わっていた可能性は高いように思う。そして、明恵髪爪塔の造立には、高山寺にいた入宋僧の行弁らや明州出身の宋人周徳榮の関与も想定されよう。インド起源と考えられていた形態が採用されたのは、明恵のインド憧憬や釈迦への思慕を意識してのことと考えられる。

## 2、金属製阿育王塔と石造宝篋印塔

現在、高山寺境内にある明恵墓所の近くには、鎌倉前期のものとされる二基の石造宝篋印塔があり、いずれかが明恵髪爪塔にあたりと考えられている<sup>(100)</sup>。この推定が正しいとすると、高山寺の石造宝篋印塔は阿育王寺塔として造立されたということになる。旧妙真寺塔や高山寺塔に代表

される日本における出現期の石造宝篋印塔については、錢弘俶の金属製阿育王塔または中国の阿育王石塔に由来するという説が出されているが、現存作例に依拠する論法には限界があるように思われる<sup>(101)</sup>。

呉越国王の錢弘俶が阿育王造塔の故事に倣って造立したのが、金属製阿育王塔である<sup>(102)</sup>。『仏祖統紀』によると、建隆元年(九六〇)頃に弘俶は「金銅精綱」で「八万四千塔」を造立し、中に「宝篋印呪経」を納め、各地に頒布したという<sup>(103)</sup>。金属製阿育王塔は、銅製、鉄製、銀製の三種が現存しており、銘文から銅製塔は顯徳二年(九五五)、鉄製塔は乾徳三年(九六五)の製造と判明する。蘇州虎丘の雲岩塔から発見された鉄製塔の塔身には、金瓶がはめられ、その中に舍利一粒が入っていたという<sup>(104)</sup>。銅製塔に納入されたと推測される『宝篋印陀羅尼経』の版本は、仏舎利の代用品(法舍利)とみられる<sup>(105)</sup>。三種いずれも塔身の四面に本生図が表現されており、天和二年(七四三)の『唐和上東征伝』に見える阿育王寺塔の塔身についての記述と一致する<sup>(106)</sup>。また銅製塔、鉄製塔の銘文には、八万四千の「宝塔」とある。以上から、錢弘俶の金属製阿育王塔は、インド起源とされていた阿育王寺の阿育王塔の形態を模して造立された舍利宝塔と考えられる。

錢弘俶が造立した銅製阿育王塔⇨舍利宝塔は日本にも請来され、数点が現存している<sup>(107)</sup>。ただし、それと同じ系統を引く石塔などの造形物は、『宝篋印陀羅尼経』とは直接の関係がないにも関わらず、日本では宝篋印塔(宝篋印石塔)という名称により流布することになる。その理由を考える際に注目すべきが、康保二年(九六五)に道喜が撰述した『宝篋印陀羅尼経記』である<sup>(108)</sup>。これは応和元年(九六一)に道喜が「肥前国刺史」から見せられた錢弘俶の「銅塔」についての記録で、天曆十一年(九五七)にこの塔を唐物として中国から請来した日延からの伝聞情報<sup>(109)</sup>が記されている。続いて、塔中から見出した『宝篋印陀羅尼経』の功德

を述べている。この記録は、『宝篋印陀羅尼經』の末尾に付記される形で流布し、永暦元年(一一六〇)の高山寺本、仁安三年(一一六七)の真福寺本などが知られる。<sup>(109)</sup>そして、すでに平安末期には、この記述を受けて、阿育王塔の形態による塔が、南都周辺では宝篋印塔という名称で流布していたようである。<sup>(110)</sup>

文治四年(一一八八)、観俊は勸進によって、笠置寺に「三尺蒔絵宝篋印塔」の造立しようとした。<sup>(111)</sup>その際の申状によると、十方諸仏が常にその中に集まるという思想から、「化仏数千体」を金蒔絵で表し、塔内には「七寸白檀弥勒菩薩像一軀」を安置するという。凝然の『円照上人行状』には、重源が東大寺戒壇院を再建した時に、壇上に「宝篋印木塔」を安置したとある。<sup>(112)</sup>また、大和国の室生寺には永正四年(一一五二)の木造黒漆塗宝篋印塔形舍利厨子が現存し、基礎と笠の残欠が伝わる永仁四年(一二九六)の称名寺蔵の木造金銅装宝篋印塔もこれと同様の形態であったようである。<sup>(113)</sup>以上のような木造宝篋印塔については、中国に源流を持つことは確かだが、金属製阿育王塔と直接つながるとは考え難い。他方、旧妙真寺塔を含む鎌倉時代の石造宝篋印塔についても、塔身に仏像あるいは梵字の種子を刻むのみで、金属製塔の塔身とは大きく異なる。高山寺塔の塔身に何の表現もないのは、何らかの事情でそれを墨書などに代えた可能性があろう。現存する中国の阿育王石塔では、一二世紀初め頃から、金属製塔と共通する従来の図像から逸脱し、塔身に仏像を表現するなど多様化が始まるといえる。<sup>(114)</sup>先述した南宋画五百羅漢図の一図に描かれた阿育王塔でも、塔身には仏像を表現するのみである。南宋代の中国では、阿育王塔として、銭弘俶の金属製とは異なる形態の図像が流布していたとみてよからう。高山寺塔すなわち明恵髮爪塔の形態的な起源は、そうした阿育王塔の図像にあるように思われる。

#### おわりに

鎌倉時代の高山寺には、南宋から福州版に代表される文物の他、南宋版章疏に伴う宋代華嚴宗の教学、阿育王寺塔などの知識がもたらされていたが、言うまでもなくそれは人間の日宋往来と交流があつて初めて実現するものであつた。平安後期から鎌倉中期にかけては、宋商人(海商)の商船によつて、大量の唐物が南宋から日本に請来された。鎌倉前期の僧侶は、彼ら宋商人とのつながりを持つて初めて、南宋の文物・知識を得、さらにはその商船に同乗して入宋することができた。<sup>(115)</sup>高山寺の明恵集団は、宋商人と密接な関係があつたからこそ、行弁らの入宋を実現させ、宋人書生を受け入れることができたと考えられるのである。もちろん明恵集団に帰依し、入宋僧を経済的に支援した「法性寺刑部入道」を始めとする俗人の存在も忘れてはならない。

さて鎌倉前期には、榮西や俊芻を嚆矢とする入宋僧は、文物の請来のみにとどまらず、南宋の寺院に参学し、当時の日本にはなかつた僧侶集団の儀式や作法をもたらしした。そして、それが社会的な支持を得たことにより、禪家・律家という新たな僧侶集団の成立に結実した。<sup>(116)</sup>これに対して明恵集団は、同じように南宋の文物や知識を取り入れたものの、僧侶集団の儀式・作法については学んだ形跡がない。他方で、先述のように毎月二回の説戒は、僧侶集団を一体化する上で重要な役割を果たしたと考えられる。<sup>(117)</sup>今後は、明恵没後も含めて、高山寺の僧侶集団がどのように形成・維持されていたかについて検討を進めていきたい。

#### 〔註〕

(1) 田中久夫『明恵』(吉川弘文館、一九六一年)、同『鎌倉仏教雑考』(思文閣出版、一九八二年)、奥田勲『明恵 遍歴と夢』(東京大学出版会、一九七八年)、明恵上人と高山寺編集委員会編『明恵上人と高山寺』(同

- 朋舎出版、一九八一年)、野村卓美『明恵上人の研究』(和泉書院、二〇〇二年)。
- (2) 「明恵上人夢記」(『明恵上人資料』第二)。奥田勲「明恵世界の内外」(前註1書)、河合隼雄「明恵 夢を生きる」(『河合隼雄著作集 第九巻 仏教と夢』岩波書店、一九九四年、初出一九八七年)参照。
- (3) 田中久夫「義林房喜海」(前註1第二書、初出一九七五年)。
- (4) 高橋修『中世武士団と地域社会』(清文堂出版、二〇〇〇年)、同「武士団の支配論理とその表象」(『歴史評論』六一、二〇〇一年)。
- (5) 『古寺巡礼京都32 高山寺』(淡交社、二〇〇九年)。
- (6) 「高山寺明恵上人行状(仮名行状)」(『明恵上人資料』第二)。本来は上中下の三巻から成るが、現存の仮名行状は中巻を欠いている。ただし、建長七年(一二五五)に高信が喜海の仮名行状を漢文体に改変した漢文行状は三巻分そろっており、当初の仮名行状の全体像をうかがい知ることが出来る(『高山寺明恵上人行状(漢文行状)』同前)。
- (7) 「高山寺縁起」(『明恵上人資料』第一)。
- (8) 「毎日学問印信次第」(『大日本史料』五編之七、貞永元年正月十九日条)。
- (9) 「奈良六大寺大観 東大寺三六二、四頁、奈良国立博物館他編『大仏開眼一二五〇年 東大寺のすべて』(朝日新聞社、二〇〇二年)一五〇頁。「高山寺縁起」によると、高山寺三重宝塔の後壁の裏面に「華嚴善財善知識」、禪堂院持仏堂の北壁に「華嚴五十五知識」が描かれており、いずれも明恵が「唐本」から転写した図像が利用されたと考えられる。なお、この曼荼羅と画面構成が類似する高山寺本「華嚴海会諸聖衆曼荼羅」については、森実久美子「華嚴海会諸聖衆曼荼羅についての一考察」(『国華』一三六二、二〇〇九年)参照。
- (10) 石田尚豊「華嚴海会善知識曼荼羅図」(『MUSEUM』一五五、一九六四年)、同「明恵上人をめぐる華嚴変相図」(前註1書、初出一九六五年)、同「華嚴経絵」(至文堂、一九八八年)。この曼荼羅の中尊は盧舎那仏で、明恵はその著「華嚴仏光三昧観秘宝蔵」で、「毘盧舍那像」を観想する際に、その手印については「唐本善知識中尊図」に依拠するようにと記している(巻上、『大日本仏教全書』一三三)。
- (11) 建暦元年(一二二二)に転写のため、九条道家のもとに「五十五善知識像一鋪」を持参したこと、「花嚴善知識ノママタラ(曼荼羅)」を貞慶に送ったことが知られる(「玉藻」貞元五年十月一日条、思文閣出版、「明恵上人歌集」、新日本古典文学大系『中世和歌集 鎌倉篇』)。石田尚豊前註10論文参照。
- (12) 「明恵上人神現伝記」(『明恵上人資料』第一)。
- (13) 「高山寺文書」(『大日本史料』五編之七、貞永元年正月十九日条)。
- (14) 「明恵上人夢記」第十篇(前註2)。
- (15) 「小右記」長和四年七月二十一日条(大日本古記録)。
- (16) 「新猿楽記」(東洋文庫)。
- (17) 「参天台五台山記」第四、熙寧五年十月十五日条(科学研究費補助金研究成果報告書『遣唐使の特質と平安中・後期の日中関係に関する文献学的研究』研究代表者・森公章、二〇〇九年)。
- (18) 例えば、安貞元年(一二二七)に藤原為家(定家の息)の邸宅で開かれた連歌会で用意された「白琉璃器」「青琉璃酒器」は、唐物の白磁や青磁と考えられる(『明月記』同年三月二十日条、国書刊行会)。博多では人物をかたどった中国陶磁も出土している(大庭康時『中世日本最大の貿易都市・博多遺跡群』新泉社、二〇〇九年、七二頁)。
- (19) 高橋修「湯浅党の構成」(前註4書)。
- (20) 「明恵上人夢記」第四篇(前註2)。
- (21) 高橋修「湯浅党の構成」(前註4書)。
- (22) 「高山寺明恵上人行状(仮名行状)」上(前註6)。高山寺蔵『華嚴経探玄記』巻十五・十七の奥書によると、正治二年(一二〇〇)に明恵は「四条糸野兵衛尉宿所」「石垣兵衛殿宿所」を訪れている(『高山寺聖教類』第四部第一六四函1、『高山寺経蔵典籍文書目録』第二、以下「聖教」四一・一六四1のように表記する)。ここから、石垣庄糸野に館を持っていた宗光の宿所が、京都の四条にあったことが分かる。
- (23) 「神護寺資料」神護寺畧記(『校刊美術史料』寺院篇中巻)。嘉祿二年(一二二二)の神護寺供養願文には、経蔵に「唐本一切経」と「紺昏金字一切経」が安置されたことが記されている(同前)。応永九年(一四〇二)

- の『神護寺規模殊勝之条々』によると、「紺紙金字一切経」は文治元年(一一八五)に神護寺に安置されたという(同前)。
- (24) 「公卿補任」後鳥羽天皇(新訂増補国史大系)。
- (25) 「高山寺聖教類」四―二二六、一四二九、三二。
- (26) 『大方仏華嚴経』(四十華嚴) 卷十二は、「高雄経藏金泥之本」で校訂されている(高山寺聖教類)四―一二八)。
- (27) 「高山寺聖教目録」(高山寺経藏古目録)。
- (28) 福州版については、中村菊之進「宋福州版大藏経考(一)」「(三)」「密教文化」一五二―四、一九八五年)参照。
- (29) 「聖教」四―八二七、十二七―一〇四一、三、六、七。奥田勲前註一書四五―八頁参照。
- (30) 俊仍は南宋版と考えられる「華嚴章疏百七十五卷」を請求しており、明惠集団がこれに興味を示した可能性は高い(「泉涌寺不可棄法師伝」『大日本仏教全書』一一五)。
- (31) 「華嚴仏光三昧観冥感伝」(『日本大藏経』華嚴宗章疏下)。柴崎照和「明恵と仏光三昧観(一)」「(南都仏教)六五、一九九一年)参照。
- (32) 「湯浅氏系図」(高橋修前註4書)。
- (33) 「神護寺資料」神護寺文書(前註23)。高橋修前註19論文参照。
- (34) 「施無畏寺文書」一(『和歌山県史』中世史料2)。上横手雅敬「湯浅氏関係資料三題」(『鎌倉時代政治史研究』一九九〇年、初出一九八四年)。
- (35) 「崎山家文書」一ヨ(『和歌山県史』中世史料2)。
- (36) 「唐本一切経目録」(『明恵上人資料』第四)。巻中を欠くが、後述の東寺本で補うことができる。
- (37) 湖州版(思溪版)については、中村菊之進「宋思溪版大藏経刊記考」(『文化』(東北大学)三六―三、一九七二年)参照。
- (38) 常盤大定「宋代に於ける華嚴教学興隆の縁由」(『支那仏教史の研究』第三、春秋社松柏館、一九四三年、初出一九三五年)には、この頃の高山寺にあった南宋版章疏が集成されている。
- (39) 「明恵上人夢記」第十篇(前註2)。自筆本が現存し、後半部分の写真が奥田勲前註一書一三四頁に掲載されている。なお、貞応二年(一一二二)
- 三)には、ある経藏で「唐本鐫文摺書」を読んだ夢を見ている(同前)。
- (40) 天理図書館編『善本写真集19 宋版』(天理大学出版部、一九六二年)、大阪市立博物館他編『天理秘蔵名品展』(天理教道友社、一九九二年)、天理大学附属天理図書館編『天理図書館稀書目録 和漢書之部第四』(天理時報社、一九九八年)、同編『宋元版』(天理ギャラーリ、二〇〇〇年)所々に欠損があるが、全体に裏打ちが施され、欠損部は墨書で補足されている。見返しの記述から、天保九年(一八三八)に慧友により修復され、「元久写本」によって校合されることが分かる。この時に冊子本を現状の卷子本に改め、元久年間(一一〇四―六)のものという写本により欠損字が補足されたとみられる。同じ南宋版またはその転写本が、南北朝に東大寺東南院の経藏にあったことも知られる(「東南院御前聖教目録」、真福寺善本叢刊『真福寺古目録集二』)。
- (41) 両書はそれぞれ「明州阿育王山志」卷十三、卷五(『中国仏寺史志集刊』一輯一二冊)に収録されているが、南宋版と文字の異同がある。梵寧については、牧田諦亮「君主独裁社会に於ける仏教々団の立場(上)(下)」「(仏教文化研究)三・四、一九五三・四年)参照。
- (42) 聖井の鰻魚(魚菩薩)は、唐・道宣の『集神州三宝感応録』卷上、『唐和上東征伝』にも見えるが、飛躍の記述はない(『大正新脩大藏経』五二、『大日本仏教全書』一一三)。南宋・咸淳五年(一二六九)の『仏祖統紀』卷五十三には、「阿育王山東一里有二聖井靈鰻」とあり、典拠として「寧僧統所レ作舍利塔伝・靈鰻伝」を示している(『大正新脩大藏経』四九)。栄西は『興禅護国論』に「宋朝奇特」の一つとして、「育王山鱷鰻現、現則雨下云云」を挙げている(日本思想大系『中世禅家の思想』)。
- また、『普門院経論章疏語録儒書等目録』に見える「宝塔伝一卷」が「舍利宝塔伝」だとすると、円爾が東福寺に請求した可能性がある(大日本古文书『東福寺文書』)。さらに、建長元年(一二四九)に入宋した禅僧の覚心は翌年、阿育王寺で「鰻菩薩・舍利等伝」を得たと伝えられる(『鷲峰開山法灯円明国師行実年譜』『統群書類従』九上)。
- (43) 「勸発菩提心文」(『正統藏経』一〇三)。仁和寺藏「勸発菩提心文」の「点本」として、この明恵本が利用されている(仁和寺探訪目録『大日

- 本史料」五編之七、貞永元年正月十九日条。
- (44) 「華嚴一乘分齊復古記」(『正統藏経』一〇三)。高山寺蔵の『華嚴清涼国師礼讃文』には、建保四年の喜海書写奥書が引用されている(「聖教」四―一九15)。この仏典は、京都国立博物館に所蔵される高山寺旧蔵の南宋版が知られ、喜海がこれを転写したと考えられる(京都国立博物館編『京都国立博物館蔵品目録』同館、一九六六年、三〇頁)。
- (45) 「遣教経論記」巻第一(『正統藏経』八六)。
- (46) 京都府教育委員会編『浄土宗西山派三本山 誓願寺・光明寺・禅林寺古文書目録』(同教委、一九七八年)九四頁。
- (47) 宋代の華嚴宗については、常盤大定前註(38)論文、高雄義堅「宋室の南渡と仏教の復興」(『宋代仏教史の研究』百華苑、一九七五年)、吉田剛「晋水浄源と宋代華嚴」(『禅学研究』七七、一九九九年)参照。
- (48) 「円覚道場礼懺禅観法事」巻第三(『正統藏経』二二八)。
- (49) 「評金剛鐸」(『正統藏経』一〇三)、『金沢文庫古文書』識語編五二〇、五二六、七九四号、『真福寺善本目録 続輯』一三〇―二頁。
- (50) 「高山寺文書」(『鎌倉遺文』七八一―一号)。田中久夫「明恵上人の置文」(前註1第二書)参照。
- (51) 「高山寺文書」(『鎌倉遺文』四二六二号)。
- (52) 「高山寺代々記」(『高山寺典籍文書総合調査報告論集』平成六年度、一九九五年、宮澤俊雅氏の翻刻)。
- (53) 「聖教」四―四七21、22、四六30。
- (54) やや時期が下るが、弘長元年(一二二六)に金沢貞時の支援により西大寺と称名寺に安置する二組の福州版を明州から請求した西大寺流律僧の定葬は、同時に「種々唐物」をもたらしたようである(「関東往還記」弘長二年三月十三日条、『西大寺観尊伝集成』。高橋秀栄「北条実時と思円房観尊」(『印度学仏教学研究』三七―一、一九八八年)参照)。
- (55) 建暦三年(一二二二)と建保五年(一二二七)に、行弁は高山寺で聖教を書写しており、その間の入宋と考えられる(「聖教」四―八二72、一三一2―7)。
- (56) 「高山寺文書」(『鎌倉遺文』三九二九号)。
- (57) 第八十六箱の「同(含註戒本)疏科四卷」、第八十七箱の「同(行事抄)資持記十六卷」、第八十八箱の「正源記第四」には、「弁海房進」の注記がある。三箱の律宗章疏は弁海房が請求した南宋版の可能性がある。
- (58) 「高山寺代々記」(前註52)。
- (59) 「高山寺文書」(『鎌倉遺文』四二五九号)。田中久夫前註50論文参照。
- (60) 「唐本一切経目録」巻下(『昭和法宝総目録』二巻)。
- (61) 「湖州思溪円覚禅院新雕大藏経律論目録」(『昭和法宝総目録』一卷)。
- (62) 国際貿易港としての明州の機能については、榎本涉「明州市舶司と東シナ海海域」(『東アジア海域と日中交流』吉川弘文館、二〇〇八年、初出二〇〇一年)参照。
- (63) 国文学研究資料館所蔵マイクロ資料セ1―4―11。この文献の存在は、箕浦尚美氏から提供頂いた、中山一磨氏の報告資料「善通寺蔵『真友抄』について」(説話文学会、平成二十年十二月)から知り得た。
- (64) 「古経題跋」巻上(国書刊行会編『解題叢書』同会、一九一六年)。
- (65) 慧因寺(高麗寺)については、「玉岑山慧因高麗華嚴教寺志」(『中国仏寺史志彙刊』一輯二〇冊)、竺沙雅章「高麗寺のことなど」(『宋元仏教文化史研究』汲古書院、二〇〇〇年、初出一九八二年)参照。
- (66) 「華嚴経談玄決択」巻第三(『正統藏経』一一)。
- (67) 石林行肇(一二二〇―八〇)が住持の時に、「日本蓮上人」が湖州版の刊行を求めて法宝寺に来ている(佐藤秀孝「石林行肇の活動と『石林和尚語録』について(上)」、『駒沢大学禅研究所年報』一九、二〇〇八年)。
- (68) 山本鏡之助「岩屋寺誌」(尾張高野山岩屋寺、一九八〇年、初出一九三四年)五一―三頁。
- (69) 「金沢文庫古文書」識語編518。巻二にも「写本記云」としてほぼ同文が引用されており、その底本と推測される写本が高山寺に所蔵されている(「聖教」四―二〇三8、「宋版」とあるがその転写本であろう)。
- (70) 義天による諸宗章疏の刊行については、池内宏「高麗朝の大藏経」(『満鮮史研究』中世第二冊、座右宝刊行会、一九三七年、初出一九二四年)、『大屋徳城著作選集 第七巻 高麗統藏雕造放』(国書刊行会、一九八八年、初出一九三七年)、朴相國「義天の教蔵」(石上善應教授古稀記



- 念論文集刊行会編『仏教文化の基調と展開』二卷(山喜房仏書林、二〇〇一年)参照。
- (71) 「聖教類」四―二〇三―1。「四分律刪繁補闕行事鈔」卷上之四には、正応四年に同院で移点を施した旨の奥書がある(四―四三―1―4)。
- (72) 慶政については、橋本進吉「慶政上人の事蹟」(『橋本進吉博士著作集 第十二冊 伝記・典籍研究』岩波書店、一九七二年、初出一九二一年)、同「慶政上人伝考」(同前、初出一九一七年)、平林盛得「慶政上人伝考補遺」(『国語と国文学』四七―一六、一九七〇年)参照。
- (73) 「聖教」四―一三―39。
- (74) 「明恵上人歌集」(前註11)。
- (75) 「百鍊抄」嘉祿三年三月二十四日条(新訂増補国史大系)。慶政は明恵の五七日忌辰に際しての修善の導師を勤めた(「最後臨終行儀事」『明恵上人資料』第一)。また、明恵の百箇日忌辰に際して高山寺の阿弥陀堂が建立供養された際、慶政がその導師を勤めている(『高山寺縁起』)。
- (76) 「法華山寺縁起」(『図書寮叢刊』伏見宮家九条家旧蔵諸寺縁起集)。
- (77) 羽田亨「日本に伝はる波斯文に就て」(『羽田博士史学論文集 下 言語・宗教篇』(『東洋史研究会』一九五八年、初出一九二〇年)、荻野三七彦「波斯文」文書と勝月坊慶政」(『古文书学研究』二二、一九八三年)。
- (78) 「風雅和歌集」卷十八(中世の文学)。
- (79) 中村一紀「僧慶政と宋版一切経について」(神奈川県立金沢文庫編『神奈川県立金沢文庫保管管宋版一切経目録』(同文庫、一九九八年)、同「書陵部所蔵宋版一切経の来歴について、その印造から現代まで」(『禁裏・公家文庫研究』二、二〇〇六年)。
- (80) 「漂到琉球国記」(『図書寮叢刊』諸寺縁起集)。
- (81) 文永四年(一二六七)以前に、沙弥蓮寂(三郎入道)が南宋から「馬瑙台盤二枚」をもたらしたし、慶政に進上したことも知られる(『金堂本仏修治記』、『図書寮叢刊』伏見宮九条家旧蔵諸寺縁起集)二七)。
- (82) 「新抄」文永二年九月十九日条(史籍集覧)。この日記については、遠藤珠紀「尊経閣文庫所蔵『外記日記(新抄)』について」(『日本歴史』七三一、二〇〇九年)参照。
- (83) 「民経記」寛喜三年六月三日条(大日本古記録)。
- (84) 「仁和寺御日記」(『続群書類従』二九下)。
- (85) 「伏見宮記録」(『鎌倉遺文』二一六二号)。
- (86) 「民経記」嘉祿二年四月三日条(前註83)。
- (87) 「壺囊鈔」卷第四十九(日本古典全集)。
- (88) 林文理「博多綱首の歴史的位置」(大阪大学文学部日本史研究室編『古代中世の社会と国家』清文堂出版、一九九八年)。
- (89) 「東大寺円照上人行状」下(東大寺教学部編)。
- (90) 「阿育王経」卷第一(『大正新脩大藏経』五〇)、「阿育王伝」卷第一(同前)。
- (91) 村田治郎「中華における阿育王塔形の成立」(『史迹と美術』三八―一〇、一九六八年)、同「中国の阿育王塔(1)」(『仏教芸術』一一四、一九七七年)。
- (92) 鈴木敬編『中国絵画総合図録』第五卷(東京大学出版会、一九八三年)一〇〇頁、奈良国立博物館編『聖地寧波』(同館、二〇〇九年)一五五頁。
- (93) 森克己「日宋交通と阿育王山」(『日宋文化交流の諸問題』刀江書院、一九五〇年)、同「仏舍利相承系図と日宋交通との連関」(同前)。
- (94) 「四明尊者教行録」卷第七、伝教院新建育王石塔記(『大正新脩大藏経』四六)。
- (95) 奈良国立博物館編前註92書。
- (96) 佐藤重聖「中国宝篋印塔の編年について」(『シルクロード学研究紀要』二、二〇〇七年)、山川均「調査の経緯」(同前)。なお、杭州の飛來峰にある南宋石刻の布袋弥勒および羅漢図に、阿育王塔を右手に捧げた羅漢像が見出せる(杭州市歴史博物館他編『飛來峰造像』文物出版社、二〇〇二年、一一―二頁)。
- (97) 「集神州三宝感通録」卷上(前註42)。「高山寺聖教目録」の第五十五箱に「三宝感通録三卷」として見える。
- (98) 「仏祖統紀」卷第三六(前註42)。この記述は、先の『集神州三宝感通録』巻上にもある(同前)。舍利宝塔の出現は西晋・太康二年(二八二)とされるが、阿育王寺の創建は実際にはこの時だとする説がある(村田

治郎前註91第二論文。

- (99) 梁代の『高僧伝』卷十三、『集神州三宝感通録』卷上では、長干寺の塔を掘ったところ、鉄函・銀函に包まれた金函の中から三舍利と爪甲、髪が見つかったとしている(『大正新脩大藏経』五〇、前註42)。村田治郎「中国の阿育王塔(2)」(『仏教美術』一一七、一九七八年)参照。
- (100) ただし、『高山寺縁起』が示す所在地と異なることから、これを疑問視する見解もある(川勝政太郎「宝篋印塔巡歴」『京都の石造美術』木耳社、一九七六年、吉河功「石造宝篋印塔の成立」第一書房、二〇〇〇年)。
- (101) 最近の研究では、石造阿育王塔の影響が強調される傾向にある。吉河功前註100書、岡本智子「日本における石造宝篋印塔の成立過程とその意義」(『日引』六、二〇〇五年)、同「中国の宝篋印塔と日本の宝篋印塔」(『シルクロード学研究紀要』二七、二〇〇七年)、山川均「宝篋印塔とその起源」(『石造物が語る中世職能集団』山川出版社、二〇〇六年)、同「石造宝篋印塔の日本への将来について」(『シルクロード学研究紀要』二七、二〇〇七年)、同「石造宝篋印塔の起源について」(『中世石造物の研究』日本史料研究会、二〇〇八年)、佐藤重聖前註96論文参照。
- (102) 村田治郎「中華における阿育王塔形の諸塔例」(『史迹と美術』三九一一、一九六九年)、岡崎讓治「銭弘俶八万四千塔考」(『仏教芸術』七六、一九七〇年)。
- (103) 「仏祖統紀」卷第四十三(前註42)。
- (104) 村田治郎前註102論文。
- (105) 「一切如来心秘密全身舍利宝篋印陀羅尼経」(『大正新脩大藏経』一九)。
- (106) 「唐大和上東征伝」(前註42)。
- (107) 村田治郎・岡崎讓治前註102論文。
- (108) 「宝篋院陀羅尼伝来記」(『大日本仏教全書』一一六)。
- (109) 西岡虎之助「日本と呉越との交通」(『西岡虎之助著作集 第三卷 文化史の研究』三一書房、一九八四年、初出一九二三年)、竹内理三「入呉越僧日延伝」(『日本歴史』八二、一九五五年)、岡崎讓治前註102論文。
- (110) 平安末期の作とされる東京芸術大学蔵の鏡には、鏡像として阿育王塔

の図像が刻まれている(大和文華館編『鏡像の美』同館、二〇〇六年)。関連して、文永十二年(一二七五)の神宝注文によると、石清水八幡宮の正殿東御前には「御正体」(鏡)の一つとともに、「仏舍利敷」を納める「宝篋印塔一基」が置かれていた(『鎌倉遺文』一一八〇四号)。

(111) 「弥勒感心抄」(『鎌倉遺文』五〇〇六七号)。

(112) 「東大寺内照上人行状」中(前註89)。東大寺の新禅院には、弘安四年(一二八二)までに、聖守によって「宝篋印石塔」が造立され、その中には三三粒の仏舍利が納入された(『鎌倉遺文』一四四一三三号)。舍利塔として、宝篋印塔の形態が採用されたのであろう。永仁五年(一二九七)の『普通唱導集』では、「宝篋印塔」と銭弘俶が関連づけられている(村山修一「古代仏教の中世的展開」法蔵館、一九七六年)。

(113) 光森正士他編『平成古寺巡礼展』(NHK、一九九八年)一一二頁、奈良国立博物館編『仏舍利と宝珠』(同館、二〇〇一年)一三一頁、神奈川県立金沢文庫編『釈迦追慕』(同文庫、二〇〇八年)四四―五頁、同編『称名寺の庭園と伽藍』(同文庫、二〇〇九年)五〇頁。絵画資料としては、鎌倉後期の『石山寺縁起』卷一に描かれている舍利塔が参考になる(日本絵巻大成、岡崎讓治監修『仏具大事典』鎌倉新書、一九八二年、三六頁)。

(114) 佐藤重聖前註96論文。

(115) 山内晋次「日宋貿易の展開」(加藤友康編『日本の時代史6 撰関政治と王朝文化』吉川弘文館、二〇〇二年)。

(116) 拙稿「律法興行と律家の成立」(『中世禅律仏教論』山川出版社、二〇〇九年、初出二〇〇六年)。

(117) 「高山寺古文書」第二部一、「梅尾説戒日記」(『明恵上人資料』第三)。田中久夫「梅尾説戒日記について」(前註1第二書、初出一九六四年)参照。高山寺の説戒には、俗人も多数集まり、明恵から受戒したことが知られる(『明月記』寛喜元年五月十五日、六月一日条、前註18)。

〔付記〕本稿は平成二十一年度科学研究費補助金(特別研究員奨励費)による研究成果の一部である。

## 付表 高山寺伝来の南宋版

名称	撰者	所蔵	蔵書印	開版年代	開版場所	高山寺聖教目録の表記	箱番号
大方広仏華嚴經疏	宋・淨源	京都国立博物館(巻32) 静嘉堂文庫(巻21、22、30、31、47、54、56、57、63、65、84、85、96、97、101、104、105) (巻47、49、50、61~63、68、69、74、78~80、93~95、97、99、110、111、118) 成實堂文庫(巻41、45) 大東急記念文庫(巻91、94、104)	高山寺 十無尽院	南宋・紹興16年 (1146)		註華嚴經・120巻(唐本)	1~4
大方等仏華嚴經隨疏演義鈔	唐・澄觀	静嘉堂文庫(巻3~20、22~25、41~43) (巻51~53、56~58、60)	高山寺 十無尽院	南宋・紹興元年 (1190)		隨疏演義鈔・60巻(唐本)	5、6
大乘起信論疏	唐・宗密	個人(巻下2、嘉定4年加點)	高山寺	南宋		起信論疏・2巻	13-19
大方広仏華嚴經普賢行願 昌隨疏義記	唐・宗密	第4部41-19(巻1~6)		南宋		同(行願品)隨疏義記・6 巻	16-4 80-2
(起信論疏筆削記)	宋・子塔	禪林寺(写本、巻6)				同(起信論註疏)筆削記・ 6巻	16-6
金剛般若經略疏	唐・智儼	第4部41-9 称名寺(写本)		南宋・乾道5年 (1169)		金剛經略疏・1巻	17-1
持釈金剛經纂要	唐・宗密	第4部45-18、19	高山寺	南宋		同(金剛)經纂要・2巻	17-3 80-14
金剛般若經疏論纂要	宋・子塔	第4部45-7、8(上下)	高山寺	南宋		同(金剛)經註纂要・2巻	17-4 80-15
金剛經纂要刊定記	宋・子塔	第4部46-15~18(巻1、3、5、6) 静嘉堂文庫(巻2~4)	高山寺	南宋		同(金剛)經纂要刊定記・ 6巻	17-5 80-16
孟蘭盆經疏	唐・宗密	成實堂文庫	高山寺	南宋		孟蘭盆經疏・1巻	17-7
蘭盆經疏会通今記	宋・普觀	第4部45-6(巻下) 台湾・中国国家図書館(巻上)		南宋		同(孟蘭盆經疏)会古通今 記・2巻	17-8 80-5
注仁王護国般若經	宋・淨源	第4部39-37(巻4) 大谷大学図書館(巻1并序) 京都国立博物館(巻4)	高山寺	南宋		註仁王經疏・4巻(新經)	17-13
華嚴經内章門等雜孔目	唐・智儼	第4部41-13、47-13(巻1、2) 称名寺(写本、巻1)		南宋・紹興16年 (1146)	杭州	(華嚴經)孔目章・4巻	18-1 13-6
華嚴五十要問答	唐・智儼	個人(前巻) 第4部47-12(後巻)	高山寺	南宋		(華嚴經)五十要問答・2 巻	18-3 12-3
華嚴經旨歸	唐・法藏	第4部47-29、203-3	高山寺	南宋・紹興12年 (1142)		(華嚴經)旨歸・1巻	18-9 13-3 80-8
華嚴三昧章	唐・法藏	重書27	高山寺	南宋		華嚴三昧章・1巻	18-10
(華嚴經法界觀門智灯疏)	宋・紹元	称名寺(写本)				同(註法界觀)智灯疏・1 巻	18-15
華嚴法界觀通玄記	宋・本嵩	第4部45-24(巻中下)	高山寺	南宋		同(註法界觀)通玄記・3 巻	18-16
金師子章雲間類解	宋・淨源	第4部203-4	高山寺	南宋		同(金師子)章雲間類解・ 1巻	18-19
禪源諸詮都序叙	唐・宗密	第4部45-28(巻上下)	高山寺	南宋		禪源詮・1巻	18-22 81-7
(勸発菩提心文)	唐・斐休	已統藏經		祖本は南宋・紹興22年(1152)		勸発菩提心文・1巻	18-26
華嚴一乘教義分齊章	唐・法藏	第4部47-14(巻上)	高山寺	南宋		華嚴五教章・3巻	19-1
華嚴一乘教義分齊章復古 記	宋・師会	第4部45-3(巻2) 已統藏經		南宋・慶元2年 (1196)		同(華嚴五教章)復古記・ 3巻	19-2
焚薪	宋・師会	第4部45-14(巻1) 個人(巻1、2)	高山寺	南宋		同(華嚴五教章)焚薪・2 巻	19-3 81-8
注同教問答	宋・善熹	第4部41-20	高山寺	南宋		註同教問答・1巻	19-5
註華嚴同教一乘策并序・ 評復古記	宋・希迪	第4部45-1	高山寺	南宋		同教一乘策・1巻	19-6
(評金剛鐸)	宋・善熹	已統藏經				評金鐸・1巻	19-8
遺教經論記	宋・觀復	第4部43-22、47-30(巻2) 個人(巻1) 已統藏經(巻1)	高山寺	南宋		遺教經論疏・3巻	19-13 81-11
清涼国師礼讃文	宋・智昉	京都国立博物館 第4部119-15(喜海写本)	高山寺	南宋		清涼国師礼讃文	19-16 81-18
(清涼国師書)		不明		南宋・紹興14年 (1144)		清涼国師書	19-17
首楞嚴經義疏釈要鈔	宋・懷遠	第4部47-20~22(巻1、4、6)	高山寺	南宋		首楞嚴經義疏釈要抄・6巻	19-18
仏国禪師文殊指南図讚	宋・惟白	大東急記念文庫	高山寺	南宋		善知識図・1巻	19-19
弁非集	宋・善熹	個人 已統藏經	高山寺	南宋		弁非集・1巻	19-21
円覚経略疏之鈔	唐・宗密	第4部39-8~10、46-24、47-15~17、 144-84(巻1、3-2、4-1、2、5- 1、2、6-1)	高山寺	南宋		円覚大疏・6巻	20-1
円覚略大疏釈義鈔	唐・宗密	第4部39-11~20、41-26、47-31、144- 85(巻2上、5上、6上、8下、9上、11 下、12上下、13上下) 已統藏經(巻13下)	高山寺	南宋・紹興9年 (1139)		同(円覚)大鈔・26巻	20-2
大方広円覚了義經	宋・真宗	第4部208-8(上下)	高山寺	南宋		御註円覚經・2巻	21-1
円覚略疏	唐・宗密	第4部144-83(巻上下)		南宋		同(円覚)経略疏・4巻	21-2
(円覚経道場修証義)	唐・宗密	已統藏經(巻3)				同(円覚)経修証義・18巻	21-4
大方広円覚了義經心鏡	宋・智聰	成實堂文庫(巻1、6) 大谷大学図書館(巻4)	高山寺	南宋		同(円覚)経心鏡・6巻	22-2
円覚疏鈔随文要解	宋・清遠	第4部45-29(巻2、7、9、10)	高山寺	南宋		同(円覚)経疏抄随文要解・ 12巻	22-3
(肇論集解)	晋・恵達	(高山寺、巻上中) 真福寺(写本)				肇論具集解・3巻	22-4

名称	撰者	所 載	蔵書印	開版年代	開版場所	高山寺聖教目録の表記	箱番号
肇論集解令撰鈔	宋・浄源	第4部203-6(巻下) 真福寺(写本)				同(肇論具集解)令撰抄・ 2巻	22-5
華嚴經疏科	唐・澄觀	第4部41-10、27、45-26、46-19-23、 25-28(巻1~5、7、8、10~16、19) 靜嘉堂文庫(巻3-6、9、11、17)	高山寺 十無尽院	南宋		華嚴大疏科・10巻	26-1
大方広円覚経大疏鈔科	唐・宗密	第4部39-28-30(中下)		南宋		円覚大疏科・上中(下欠)	26-2
大方広円覚経略疏科分	唐・宗密	第4部45-25、46-13、14(巻上下)	高山寺	南宋		同(円覚)略疏科文・上下	26-3
華嚴一乗教義分齊章科分	宋・師会	第4部45-2、23(3)	高山寺	南宋・慶元2年 (1196)		五教章科上・2本	26-4
大方広仏華嚴経普賢行願品行疏科文	唐・宗密	第4部41-2、47-18、19	高山寺	南宋		行願品別行疏科・1巻	26-5
金剛經纂要疏科		第4部45-9~11、46-29、30(2~4)	高山寺	南宋		同(金剛)經疏科・2本	26-8
金剛經纂要鈔科		第4部45-35		南宋		同(金剛)經抄科・1巻	26-9
蘭盆經疏会通今科	宋・普觀	第4部45-4、5(2)	高山寺	南宋		蘭盆經通今記科・2本	26-10
華嚴法界觀科文	唐・宗密	第4部45-16、17、144-81	高山寺	南宋		法界觀科・2本	26-11
般若心經疏科	宋・師会	第4部41-8	高山寺	南宋		心經疏科・1巻	26-12
注仁王般若經科	宋・浄源	第4部41-29、30、45-27	高山寺	南宋		註仁王經科・2本	26-13
般若波羅蜜多爾贊添科	宋・守千	第4部45-13		南宋	杭州	心經爾贊科・1巻	26-14
起信論疏科文	宋・子塔	第4部41-28	高山寺	南宋		起信論疏科・2本	26-15
法界無差別論疏要科文	宋・普觀	第4部45-12(2)	高山寺	南宋		無差別論疏科・1巻	26-16
遺教經論科文	宋・觀復	第4部47-28	高山寺	南宋		遺教經疏科・1巻(1巻)	26-17
原人論科文	宋・浄源	第4部41-3、45-20	高山寺	南宋・紹興17年 (1147)		原人論科・1巻	26-19
華嚴還源觀科	宋・浄源	第4部45-21(2)		南宋		還源觀科・1巻	26-20
大藏一覽集	宋・陳実	第4部47-32~38(巻1、3~5、7、9、 10) 実践女子大学文学芸資料研究所(巻2)	高山寺	南宋		大藏一覽・10巻	26-24
涅槃經疏三徳指帰	宋・智円	第4部39-1~7(巻1、4、6、7、10、 16、19) 靜嘉堂文庫(巻2、7~9、17、18、20)	高山寺	南宋		涅槃經指帰・20巻	30-1
大般若波羅蜜多經因法	宋・大隠	宮内庁書陵部	高山寺	南宋・淳熙7年 (1180)		大般若經因法・3巻	31-2
大般若涅槃經疏	隋・灌頂	第4部39-34(巻17)	高山寺	南宋		涅槃經疏・15巻	31-1
(因明入正理論)	唐・玄奘訳	なし				因明入正理論・1巻	39-1
(因明入正理論疏)	唐・窺基	なし				同(因明入正理論)疏・3 巻	39-2
(因明入正理論科文)		なし				同(因明入正理論)科・1 巻	39-3
(因明入正理論二量章)	唐・惠沼	なし				同(因明入正理)論二量章・ 1巻	39-4
(因明入正理論十四過類)		なし				同(因明入正理論)十四過 類・1巻	39-5
(唯識論述記)	唐・窺基	なし				唯識論述記・9巻(不具)	39-6
(唯識論述記科)		なし				同(唯識論述記)科・6巻 (第4欠)	39-7
(了義灯)	唐・惠沼	なし				了義灯・7巻(第2・4 欠)	39-8
(了義灯科)		なし				同(了義灯)科・3巻(已 上唐本)	39-9
四分律比丘含注戒本	唐・道宣	第4部49-32、51-20、52-54、55(上中 下)		南宋		同(四分律)含注戒本・3 巻	46-2 86-1
四分律含注戒本疏	唐・道宣	第4部41-6、43-4、44-7、8、49-26~ 28、50-28~35、51-1、6、7、10、52- 12、52-26~32、144-87(1上下、2上 下、3上下、4上下)	高山寺 十無尽院	南宋		同(四分律)注戒本疏・ 8巻	46-3 86-4
四分律含注戒本疏科文	宋・元照	第4部43-7、8、18、19、44-11、12、49- 4-6、50-39、40、52-60(上下)	高山寺 十無尽院	南宋		同(四分律含注戒本疏)科・ 2巻(4巻)	46-4 86-3
四分律含注戒本疏行宗記	宋・元照	第4部41-15、43-5、6、9、10、49-20 ~27、50-36~38、51-2~4、15~19、21、 25、52-4~11、53、144-82(1上下、2 上下、3上下、4上下) 成實堂文庫(2下)	高山寺 十無尽院	南宋・景定1年 (1260)		同(四分律含注戒本疏)行 宗記・8巻	46-5 86-3
釈門章服儀応法記	宋・元照	第4部43-24	高山寺	南宋		同(四分律含注戒本疏)応 法記・1巻	46-6
釈門章服儀	唐・道宣	第4部41-25、43-23	高山寺	南宋		章服儀・1巻	46-7
釈門章服儀科		第4部43-25		南宋		同(章服儀)科・1巻	46-8
闍中創立戒壇因縁	唐・道宣	第4部144-86		南宋		闍中創立戒壇因縁・1巻	46-10
四分律刪繁補闕行事鈔	唐・道宣	第4部41-1、4、16、24、43-1、2、44- 1~5、49-7~11、50-1~10、51-8、9、 52-43~52(巻上1~4、中1~4、下1 ~4)	高山寺 十無尽院	紹興3年 (1133) 景定1年 (1260)	明州	四分律行事抄・12巻	47-1 87-1
四分律行事鈔資持記	宋・元照	第4部41-21、43-16、44-18~20、49- 29、30、50-13~27、52-1、3、13~25 (上1上下、2~4、中1上下、2、3上 下、4上下、下1~4) 靜嘉堂文庫(上3、4)	高山寺	南宋	明州	同(四分律行事抄)資持記・ 16巻	47-2 87-2
四分律刪補隨機羯磨	唐・道宣	第4部43-15、51-22、52-42、144-88 (巻上下)	高山寺 十無尽院	南宋		隨緣羯磨・3巻	48-1 88-1
四分律刪補隨機羯磨疏	唐・道宣	第4部41-5、22、43-9~11、28、44-13、 14、49-31、50-41~44、51-11、24、52- 2、33~41、59、144-89(巻1上下、2上 下、3上下、4上下) 靜嘉堂文庫(巻3上、4下)	高山寺 十無尽院	南宋・景定1年 (1260)	明州	同(隨緣羯磨)疏・8巻	48-2 88-2

名称	撰者	所 蔵	蔵書印	開版年代	開版場所	高山寺聖教目録の表記	箱番号
四分律刪補隨機羯磨疏科	宋・元照	第4部43-14、44-17、50-45、46、51-14、52-62(上下)	高山寺	南宋		同(隨緣羯磨) 疏科・2卷	48-3 88-3
四分律刪補隨機羯磨疏濟録記	宋・元照	第4部41-23、43-12、13、44-15、16、21、49-12~19、50-47~54、51-5、23、52-56~58、144-90(1上下、2上下、3上下、4上下) 大東急記念文庫(2下)	高山寺 十無尽院	南宋		同(隨緣羯磨) 濟録記・8卷	48-4 88-4
浄心誠観発真鈔	宋・允堪	第4部43-20、21、26(卷上中下)	高山寺	南宋		同(浄心誠観) 発真抄・3卷	48-6
四分律刪補開行事鈔科文	宋・元照	第4部43-3、44-6、49-1~3、50-11、12、51-12、13、52-61(上中下) 個人(下)	高山寺 十無尽院	南宋	明州	行事抄科・3卷	48-8 88-5
法藏和尚伝	唐・崔致遠	重書28	高山寺	南宋・紹興19年(1149)		付法藏伝・4卷	55-1
廬山記	宋・陳舜俞	第4部144-93(卷2、3)	高山寺	南宋		廬山記・5卷(調卷4卷)	55-9
明州阿育王如来舍利宝塔伝・護塔靈變菩薩伝	呉越・贊寧	天理大学附属天理図書館	高山寺	南宋		明州阿育王山靈變伝・1卷	55-22
清凉国師十願文		第4部208-1(拓本)	高山寺	南宋		清凉国師十願・1紙	55-23
梵網經	姚秦・鳩摩羅什訳	京都大学附属図書館	高山寺	南宋		梵網經・2卷	67-2 71-2 72-2
大方広華嚴經(八十華嚴)	唐・実叉難陀訳	宮内庁書陵部	高山寺	南宋・紹興12年(1142)	紹興	唐本八十経・1部(小双紙)	69-1
(法華経)		なし				唐本法花経・1部7卷	71-3
註起信論	新羅・元曉	第4部144-80(巻下)		南宋		同(起信) 論疏・2卷	81-3
齊民要術	北魏・賈思勰	重書22(5、8)	高山寺	南宋		齊民要術・10卷	96-17
(法華経)		なし				法華経・1部7卷(唐本)	99-2
維摩経玄疏	隋・智顛	第4部45-15(2~6)		南宋		維摩経玄疏・6卷	100-1
維摩経疏	唐・湛然	第4部46-11(巻9)		南宋		同(維摩) 経疏・10卷	100-2
維摩経略疏重裕記	宋・智円	第4部46-1~10、12(巻1~10)		南宋	台州	同(維摩) 経重裕記・10卷	100-3
維摩経略疏科	宋・智円	第4部41-12(1~6)		南宋		同(維摩) 経略疏科・6卷(已上唐本)	100-4
大方広華嚴経疏	唐・澄観	第4部41-11、47-1~11(巻2、3、6、8~10、19、20、23、27、28、30) 静嘉堂文庫(巻1~5、7~9、11、18、20、22、29、30)	十無尽院	南宋・紹興16年(1146)、同20年			
(大方広華嚴経談玄決訳)	遼・鮮演	第4部203-8(写本カ、巻2~6) 称名寺(写本、巻1、2)	十無尽院				
華嚴経大疏演義鈔会解記	宋・観復	第4部203-7(巻4~6、8、9)	十無尽院	南宋			
華嚴一乘分齐章義苑疏	宋・道亭	第4部45-22(巻2) 大東急記念文庫(正応3年の写本、巻1~5、7、9、10)		南宋 底本は嘉定2年(1209)			
華嚴法相繁節	宋・道通	第4部45-32		南宋・紹興19年(1149)	杭州		
金剛記外別解	宋・観復	重書26(巻1~4)		南宋			
方等経		第4部45-33(巻1~4)		南宋			
金光明経		第4部41-7(巻4)		南宋			
金光明経玄義順正記	宋・従義	第4部39-31~33、47-23~25(巻上中下)		南宋			
金光明経玄義順正記科	宋・従義	第4部47-26		南宋			
金光明文句護国記	宋・如湛	重書25、第4部39-35(巻1~4)		南宋			
金光明経文句新訳	宋・従義	第4部39-21~27、47-27(巻1~7)		南宋			
護国科		第4部41-31(下)		南宋			
金剛般若経依天親菩薩論贊略釈本義記	唐・知恩	第4部203-5(巻上下)		南宋			
釈金光明経玄義科文		第4部39-38		南宋			
莊嚴経注経		第4部45-30(巻1~3)		南宋			
大乘理趣六波羅蜜多経	唐・般若訳	第4部144-92(巻8)		南宋			
法苑珠林	唐・道世	第4部41-32(巻53)		南宋			
明宗[華嚴融會一乘義章明宗記]	宋・師会	第4部45-31		南宋			
四分律比丘尼鈔	唐・道宣	第4部43-17(巻上上、中下、下下)		南宋			
首楞嚴壇場修証儀	宋・浄源	第4部123-34(元禄13年写本、応永30年書写奥書、十無尽院)		南宋 原本は南宋・紹興18年(1148)			
(円覚経注会本)		(高山寺)					
(華嚴経注経及科)	宋・浄源	(高山寺)					
首楞嚴義疏注経	宋・子塔	静嘉堂文庫(巻1~6、8、9)	十無尽院	南宋・淳祐9年(1249)			
蘭盆疏鈔余義	宋・日新	成實堂文庫(宋人の補鈔あり)	十無尽院	南宋			

【注記】

- ・高山寺にあった福州版一切経については、一巻も現存せず、構成は「唐本一切経目録」から判明するが、この表では省略した(多くは北宋の開版)。また、十無尽院にあったと推測される湖州版一切経は、愛知県南知多町の岩屋寺に5157帖が現存するが(国指定重要文化財)、同じく省略した。
- ・名称は、現存が確認できないものおよび写本でのみ伝わるものについては括弧で括った。
- ・所蔵は、高山寺にあるものについては、「高山寺聖教類」(「高山寺経蔵典籍書目録」)の番号を記した。これに見えないもので、常盤大定「宋代に於ける華嚴教学興隆の縁由」(「支那仏教史の研究」第3、春秋社松柏館、1943年)で所蔵とあるものは括弧で括った。寺外にある旧蔵本については、「高山寺旧蔵本調査」(石塚晴通研究代表「寺院経蔵の構成と伝承に関する実証的研究」2007年)を参照した。円覚蔵経については、底本が不明であるが、奥書から高山寺本を祖本とする写本と推測した。また以下の文献に基づき、奥書と蔵書印から旧蔵本または高山寺本の写本と判断した。「大谷大学図書館蔵宋金元版仏典目録」(「大谷大学真宗総合研究所紀要」7)、「お茶の水図書館蔵新修成實堂文庫善本書目」、「金沢文庫古文書 識語編」、「京都国立博物館蔵品目録」、「宮内庁書陵部典籍解題 漢籍篇」、「浄土宗西山派本山 誓願寺・光明寺・禪林寺 古文書目録」、「真福寺善本目録 統輯」、「静嘉堂文庫宋元版図録」、「天理図書館蔵書目録」。
- ・箱番号は、「高山寺聖教目録」(「明恵上人資料」第1本)との対応を推測し、目録の箱番号とその箱での順番を記した。また、基本的にこの順番によって全体を配列した。

(21) 高山寺の明恵集団と宋人(大塚)